

**課外教養プログラムプロジェクト  
2019年度 活動報告書**

**法政大学学生センター**

2019 年度報告書の刊行に寄せて

法政大学学生センター長 齋藤 勝

2019 年度も多くの方々のお力添えにより、課外教養プログラムプロジェクト (KYOPRO) を盛況に実施することが出来ました。心より御礼申し上げます。

昨年度の報告書において、自分自身が全く課外教養プログラムの現場に関われなかったことへの自戒の念を書きましたが、残念ながらこの一年間、その反省が活かされることはありませんでした。運営に関わる学生の皆さん、職員の皆さんには本当に申し訳なく思います。

その上で生意気なことを書くのは気が引けますが、ここ数年の課外教養プログラムは新たな時代に向けての苦悩に直面しているように思います。

課外教養プログラムのスタートは 1993 年です。今の学生さんのほとんどが生まれる前から続いているプログラムです。インターネットどころか携帯電話も一般的ではなかった頃に始められたのです。携わる人たちの心性が大きく変わったとしても、それは当たり前のことです。また人々が求める教養の在り方が変化しても、それも当然のことだと思います。

しかし、「教養」なるものと人間との付き合いの歴史というもっと長い目で見て考えると、実はこの間の変化など無きに等しいのではないのでしょうか。人は「知性」なるものに特徴づけられる生き物です。ただ、食べて寝て起きる生活を消費するだけの生き物ではありません。常に自分の周囲にある様々なものに興味・関心を持ち、疑問を抱き、それを解決して、歴史を刻んできました。そしてそのような営為が人の「生」を豊かなものにしてきたのです。教養とはまさにこの「人の「生」を豊かにする営為」の集合体です。その始まりは、先に述べたように「興味・関心を持つこと」にほかなりません。時にそれは、他人からは下らなさそうに見えることかもしれません。でも、下らないかどうかなんて、不確かなことです。その先に何があるのかなんて、突き詰めてみないと分かりませんし、永遠に分らないかもしれません。興味・関心を持つ誰かがいる限り、必ずそこには何か意味があるのです。

課外教養プログラムのスタートは、どんなことでも良いから「興味・関心を持つこと」だと思います。次にそれを突き詰めることです。そして最後にそれを他者と共有すること。こうして課外教養プログラムは完成するのではないのでしょうか。

昨年度のプログラムを見渡すと、たとえば「パスポートのいらぬブルガリア」は、企画者の関心を本当にうまく広げられているなど思いましたし、「今さら聞けない天皇の話～象徴ってなあに？～」は、企画者の興味を深く掘り下げることができているなど感じました。この二つの企画に共通しているのは、まずスタートにおいて企画者の興味・関心がストレートに発出されているところだと思います。

もし今がこのプログラムの転換期なのだとしたら、やはりまず運営する皆さんの日頃の興味・関心を磨くことが大切だと思います。多くの学生の参加が得られるかどうかなんてことに悩む必要はありません。皆さんの素直な情熱は、きっと誰かの心に響くはずで、それは数で計るものではありません。

そしてこの企画運営は全ての学生に開かれていることも忘れるべきではないでしょう。課外教養プログラムの可能性は、法政大学の学生の数だけあるのです。

本プログラムを通じ、法政大学の学生が正課教育にはない多様な教養と出会い、身につけて、成長の糧してくれることを、心から願っております。

